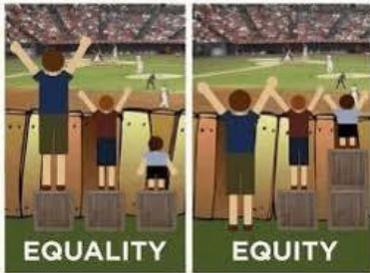


# 【ねがいましては】

令和2年7月25日  
第356号  
「公平と平等」

KYOWA SCHOOL



左の図は、平等と公平をイラスト化したものです。

EQUALITY→(平等)

EQUITY →(公平)

左は、3人の子どもたちに皆、平等に同じ高さの台を与えています。

右は、3人の子どもたちの目線が皆、同じ高さになるように、高さの違う3つの台を与えています。

実はこの図は、ある小学校の校長先生が講義で使用されたものをそのまま使っています。校長先生がなぜこの図を引用されたのか……。もちろん今の教育のあり

かたに疑問を感じているからだと思いました。ひとつに校長先生と言っても小学校だけでも全国に約2万人。もちろん公務員として働いていらっしゃいます。今の教育システムは、第二次世界大戦の終演と同時にアメリカ政府(GHQ)が打ち出したものになります。一番の特徴は「年齢主義」です。6歳から15歳まで、学校へ通う義務があり、確実に年齢ごとに学年が上がり15歳で終了します。与えられる教材はすべて共通のもの(教科書検定で合格し、中身は指導要領に沿ったもの)になっています。今さら驚かないのは、私たちのほとんどがその環境で生活してきたわけで、いつのまにか当たり前になっています。この当たり前、結構強力な洗脳力を持っているようです。それが世界の教育は、すべて日本のようなスタイルだろう、です。

私が以前から疑問に感じてきたことが、背も違う、顔も違う、家庭環境も違う、なのになぜ、子どもたちには一律に同じ教材があてがわれ、同じ宿題が出され、同じテストをされ、評価されるのか……。運動会のかけっこと同じような順位づけをされます。平等であるならば、ボクシングのように、体重別にし競うのであれば、納得のいく範囲は大きくなるでしょう。

ここに通う子のなかに、ご両親が外国の方であるお子さんが複数通っています。ここで最もハンデが生じてしまうのが、「国語」になります。外国の方々に共通して難しいと言われるのが「漢字」です。音読み・訓読みなど、書く・読むという行為は、かなり難しいと言われます。その環境下にあるお子さんたちは、ふだんの生活の中ではどのようにしているのか、まず、家庭内で飛び交う言語は、おそらくご両親の母国語でしょう。その点では、お子さんも2カ国語が話せるようになるかもしれませんが、こと、学校からの音読の宿題などは100%出来ない状態であると思います。もし学校側が音読の宿題を出すのであれば、そのことも考慮に入れなければなりません。現状はご周知の通りです。

ですからここに来ている当該のお子さんは、ことごとく国語は苦手です。国語→ことばです。ことばは国語だけではありません。社会・理科・算数などすべての教科書に使われます。つまりことば(教科書内の文字)を理解していなければ、ほぼすべての教科は全滅になります。

現実をかかげます。3月から5月にわたった長期のお休みの結果、学校からは多くの宿題が出されました。夏休みに出されるような20数ページほどの教材など。プラス新聞です。作文の一種になります。普段から日本語に堪能ではない状態で文章を書いてきなさいというわけです。そのお子さんはけなげにもここへそのできないでいる宿題を持ってきます。私は喜んで手伝います。とくに漢字や文法などの部分は、私が答えを作成し、そのまま写してもらいます。

宿題はやってあればよいのです。まさに「EQUALITY」です。

では、そのお子さんが私の作った解答を写して学校へ持って行きました。しかし本来の「まなび」は本当に身についたのでしょうか。担任の先生は知っているはずですが、それでも提出されていないからやってきなさいということが、はたして……。担任の先生は悩んでいるはずですが、いや、悩んでいることを希望いたします。しかし、悩んでいるだけではその子は救われません。具体的に行動を伴わなければ、当人は生き返ることなどできません。この小さな空間で私がしていることは、その子にとっては意味を持たない方へと大きく傾いています。私の無言の抵抗なのですが……。これは日本の義務教育制度への挑戦です。と書きながら、当該のお子さんは犠牲者のままなのです。

理想はただひとつ、「EQUITY」です。その子にあった踏み台を用意してあげることです。学校の先生にそれをしろというのは無理なことはわかっていますが、せめて、そのお子さんのご両親には、このような状態だと頭を下げてもおかしくないと思います。頭を下げるのは、もちろん政治家の方です。文部科学大臣しか考えられません。

先に挙げました校長先生は、戦っていらっしゃいます。私はそれがよくわかりました。そしてその先生は、東京都の教員として、校長職として長年職務に当たっておられました。その方が今年の春からあるところへ栄転されました。

都内の離島です。私は内心嬉しく思います。先生、将来は子どもたちのための文部科学大臣になってください。

私はこの仕事を終えるまで、すべて EQUITY で行きます。ここに通う子どもたちは皆感じています。

年齢主義をとっていない国があります。デンマークです。その国の子どもたちは学び好きが多いそうです。